
機動戦士外伝『フィクション』

紅生姜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士外伝『フィクション』

【Nコード】

N1382Y

【作者名】

紅生姜

【あらすじ】

太陽系に一基で三千万人が暮らせるスペースコロニーが数百機点在する宇宙移民達成後の未来。

宇宙世紀0089年。

宇宙の統治権を争って太陽系に点在するコロニー大半を巻き込んだ大戦を人類は経験した。

そんな時代に暮らす一人の作家志望の女性が書いた物語。

その物語を読んだ人々は時代を次のステージへ導く様に動き出す。

その中に“赤い”異名を持つ元軍人も…

序章

日当たりが悪く薄暗い部屋に本のページをめくる音だけがペラペラと響く。

「もう終わりか…」

男は静かに本を閉じる。

時計を見ると時刻はもう昼を過ぎていた。

あの店はもう開店してるので散歩がてら別の本を買いに行こう、あの埃っぽい店に。

男は黒革のソファから立ち上がると丸テーブルの上に置いてあったマグカップを手にとり、少しだけ残ったブラックコーヒーを一気に飲み干した。

クローゼットに向かう、中からグレーのジャケットを取り出して羽織ると、その姿は彼の実齢とは不釣り合いに老け込んだ印象になる。カウンターに置いてある財布や鍵をポケットに入れて玄関へ、履き古した茶色い革靴に足を滑らせると男はワンルームの部屋のドアを開ける。

表に黒いスーツを纏った体格のいい男。

「出かける」

「お車は？」

「近くを散歩するだけだ」

「お供します」

「本を買いに行くだけだ、それにお前は人相が悪い」と苦笑交じりに言うと「では、少し距離をとります」と言い残し黒服は歩いて何処かに姿を消す。

すると強い突風が吹いた。

悪戯好きな暖かい春の風。

男はそれを全身で受ける。

風は男の背中を強く押す。

まるで何かに導く様に…

宇宙の浮島に吹くはずの無い季節風に男は一瞬疑問を抱いたが、たいてい気に留めずに男は風の向かった方に歩き始めた。

近くにある街路樹の桜を見ると、いつ花が開いてもおかしくない程に蕾を大きくしている。

通り過ぎて行く人の顔や景色さえも、男はとても穏やかに感じた。

ここまで穏やかな時は、おそらく幼い頃の妹と過ごした日々以来だろつと。

「まるで嘘のようだ」

いくら中立のコロニーと言ってもここまで人々の顔が穏やかだとアノ戦争も大昔のようだ。

そんな事を考えながら町を眺めて歩き続け目的の店に着く。

いつ来ても商売をやっているとは思えない静寂に包まれた店。おまけに埃っぽい。

店頭に積まれた小汚い本の山は『ご自由にお持ち下さい』と言わんばかりだ。

「おーい」

店の奥に声をかけるとすぐに若い娘が間口まで出てくる。

「あらお客さん！ もう読んじゃったの!？」

「あいにく暇を持って余らせていな」

男がこの古本屋に通い始めたのは3週間前。

休養はいいが仕事以外で趣味らしいものがなく『とりあえず本を読んで過ごそう』と思い、店へ来る度に五巻ほど彼女のオススメを購入する。

つい先日にも本を購入したばかりなのでそう言われても当然だ。

「オススメの本は有るかね」

「じゃあ…」と彼女は奥に戻り、店番の机脇に置かれていた一冊を持ってきた。

それは本と呼ぶよりもノートか日記帳の方が正しいかもしれない。

「それは何だ？」

「私が書いたんです」と嬉しい様な恥ずかしい様な顔を見せる。

その笑顔が眩しい。

「ホントか？ 凄いな」

「私の書いた小説がやっと認められて嬉しくて、勝手に自分で製本したんです」

「よかったじゃないか」

彼女の事が素直に嬉しかった。

「どんな物語なんだ？」

「なんででしょう？ 一応戦争をテーマに書いたのですが、ぶっちゃけ純愛になるんですかね」と彼女がはにかむ。

彼女は作家志望の19歳で地道な執筆活動をしながら小遣い稼ぎに知人の古本屋の留守を任されていると語る。

彼女いわく『古本屋の仕事は、古きよき時代の名作と、読者の素直

な感想が聞ける最高の場!』だと。

「純愛か…、私には向かないよ」

「後悔はさせませんよ」

軽やかな言葉だったが、どこか自信を秘めた言葉に感じる。

若者のチカラというものかも知れない。

彼女は「是非感想を聞かせて下さい」と男に本を押し付けると店の奥に姿を消した。

「おいおい、店番が奥に引っ込んでいいのか？ 表に積んである本が盗まれるぞ？」

「表の本は沢山刷られた本なので価値は無いんです。だから持つていってくれた方が在庫が減って助かります」

たいした言い分だ。

「わかったよ、読み終えたらまた感想を聞かせに来る」店の奥にも届く様に声をかけると男は店を後にした。

少し歩いてから男は「もう出て来ていいぞ」と何処にかけるでもなく呟く、すると男の後方7、8メートル離れた小路から黒服が「流石は大佐ですね」と自笑気味に現れる。

「バレバレだよ、もう戦争は終わったのだから少しは肩の力を抜け」

「ならば何故大佐には私の様な監視役が付いているのでしょうか？」

「どこぞかの腹黒い奴らが、また私を利用する為だろう」

蓄を膨らまして春を待つ桜の街路樹を横目に二人は肩を並べて歩いていく。

「ちよつと寄り道するぞ」

「ハイ」

歩き続けていくと徐々に人気が無くなっていき、ほとんどの店のシャッターが閉じた寂れた商店街に入る。

男は黒服を先導する様に先を歩く、そして商店街の一番端の店の前で立ち止まり「ここだ」と黒服に告げた。

店は木製の小さなテラスを設けた喫茶店、ドアは閉じていたが中はクラシック音楽が大音量で鳴っている様子が伺える。

金色のドアノブを握り、ゆっくり開ける。

すると中で響いている大音量の音楽が二人の耳に襲いかかる。

「相変わらずだな、客が来たぞ」

男はカウンターで音楽にあわせて両手を振り指揮をとる熊髭の大男に声をかけるが、大音量の音楽に掻き消され何を言っているか伝わっていないだろう。

熊髭は察して音量を下げる。

「これはこれは大佐殿、失礼しました」

「今はただの男だよ、監視付きだがな」と黒服の方を見て皮肉に笑う。

「ご注文は？」

「ブレンドをブラックで、お前は？」

「同じものを」

テラス側から射す陽光が当たるテーブルの席に男と黒服が座り、男は手にしていた本をテーブルに置く。

熊髭はコーヒーを淹れながら話かける。

「今日は何を読んでいるのですか？」

「今朝一冊読み終わってしまっただけ、確かチエーホフの本だったが、タイトルを忘れてしまった」と軽く自笑。

黒服も軽く笑いながら「片っ端に読み漁るからですよ」と。

熊髭はガハガハと大口を開けて笑い「では今日お持ちのソレはまた別の本ですな」と合点した。

しばらくして熊髭がコーヒーカップを乗せた小さな丸いトレイを持ってくる。

「お待ちせしました」

大柄で熊髭を生やした男がエプロン姿でやるソレは、いつ見ても可笑しなものだ。

カチャカチャとカップとソーサーを鳴らしてテーブルに置く動作までくると男は思わず笑いそうになる。

「今回は中々良い豆が入ってますよ」

「どうせまた地球産の密輸品を、ブラックマーケットで仕入れたんだろ」と黒服に指摘されると熊髭は『バレたか』と言わんばかりにガハガハ笑い。

「お前らしいな」

「ですかね、ではごゆるりと」

熊髭はソレだけ言っとトレイを小脇に持ちカウンターに戻る。

「それじゃあ彼女の作品を拝見するか」

男はテーブルに置いていた本を手に取り最初のページを読み始める…

フィクション

母なる大地に足をつけ天に舞う鳥達を見上げ夢見た人類は、いつしか天空を音よりも速く翔け夜道を優しく照らす月にまでたどり着く。しかし人間の欲望に満ちた心は月だけに留まらず太陽系から遙か彼方離れた銀河までも求めた。

この物語は人類の未来を賭けた大戦を幾度と経験しても尚、欲望と野心に満ちた人類が作り作り上げてしまった。

一つの悲しい愛の物語：

『生きる為に必要なモノは何だろうか？』

そんな事をよく考える。

地球の生物に必要な酸素や水では無く、あくまで人間が“生きる”為に…

そんな事を考えるのは、僕自身が普通の人間と違うからだろうか？

周りにいる大人に聞いても『そんな事を考えなくていい』と言う。
確かにその通りだ。

しかし何故僕はそんな事を考えるのか？

何故大人は『考えなくていい』と言うのだろうか？

それを考えても、また眠れない日が続くだけなのに…

四角い入れ物の中で僕は目覚める。

いつもの様に白衣達が入れ物の戸を開けて迎えに来る。

「六号、時間だ」

いつも通りの機械的な声、見た目は同じ人間なのに何故こいつ等は僕達に対して冷淡なんだ。

腹が立つ！

「聞いているか」

ム力つく声だ。

「ハイ、聞こえます」

こいつ等には無愛想な位がいい、お前等と同じ様に返事をしてやるよ。

そいつ等と一緒にいた白衣の女一人に連れられて長く続くタイル貼りの床を歩く、何時見ても僕の顔が写るほど綺麗に磨かれた床が延々と続く。

清楚員が潔癖なのか管理者が潔癖なのか知らないが、その床は極端に冷たい。

「伍号と七号はセンターに着いています」

「ハイ」

「今日やる検査は昨日の内に説明されていると思いますが、何処か身体で気になる所はありませんか？ 頭が痛いとか、胸が苦しいとか？」

「大丈夫です」

普段は学習と訓練で一日を過ごすが、今日は能力テストを主に行う、その結果を今後の訓練や実験に反映するらしい。

数分歩いてセンターと呼ばれる場所に着く、そこは既に十五〜六人程の白衣が居た。

「ろくちゃん、おはよう」

あまり歳の変わらない女の子が声をかけてきた、その子は僕もよく知る子だ。

「そんなふうに呼ばないで下さい」

「六号って呼ばれるの嫌いでしょ？ だから“ろくちゃん”！」
正直『ろくちゃん』と呼ばれるのは嫌いではない、僕はそう呼ぶこ
の子を好ましく思っているからだろう。

「みんな揃ったな」

眼鏡の白衣が言った。

それを合図に白衣達が眼鏡を見る。

「これから4回目の測定検査を始める。尚この検査は前回の検査
結果と比較する為に行う、千分の一まで正確に測定してくれ」

まるで堅苦しい演説。

それを聞いて白衣達が持ち場へ散る。

女が「行きましようか」と僕と伍号、七号をセンターの左手側にあ
る扉へ促す。

検査は5項目。

前日に行う身体測定と健康診断。

今日は体力測定、学力検査、適応検査。

体力測定で1時間、その後休憩兼昼食時間を1時間、学力検査で
1時間と適応検査で2時間、計5時間かけて三つの検査を終える。

適応検査以外は何を調べるか解るが、その1項目だけ解らない、た

だ高濃度酸素水に満たされたカプセル型の水槽に入るだけの様に思える…

適応検査

ガラス越しにカプセルを眺める女と眼鏡。

「やはり六号は駄目ですね」

「前回との比較は？」

眼鏡の指示に従ってパソコンを操作する白衣が画面にグラフや数字の羅列を表示、そこを眼鏡が横から覗き込む。

「伍号、七号は適応レベルに達しています。六号も上昇傾向ですが、僅かです」

パソコンを操作する白衣が言う。

「これが限界か」

「しかし微動ですが上昇しています」

「我々は十年後の兵士を創っている訳では無い、今使えなければ無意味だ」

「そうですか？ 知能指数は130台ですし、身体能力も成人を凌駕しています。十分実戦投入可能かと？」

「専用兵器が使えなくては話にならん」

白衣は「はぁ…」と自分を納得させる様に返事をする。

眼鏡は「機体の方はどうなっている？」と女に聞く。

「順調です。第1〜第2工程は既に終了しました。あと二十日以内に全工程が終了します」

聞きたい事と違うものを言われ「テストタイプだ！」と眼鏡が声を荒げた。

しかし女はまったく動じず、ただ冷淡に「既に調整済みです」と返す。

「ならすぐにも適応実験を始めるられる用意を」

「はい」…

名前

適応検査と言うよく解らない検査は体力をかなり消耗する。

おかげで僕はすごく疲れた。

『一体何を調べる検査だ？』と思うが、これまた答えの出ない問いになる。

全ての検査を終えてセンターに戻り検査終了の長々しい眼鏡の演説を聞いている時間は地獄だ。

演説が終わった頃には、もうコロナーの人工太陽が紅く染まり始める時刻を部屋の壁掛け時計が表示していた。

女が「お疲れ様、今日は終いでいいわ、一緒に部屋に戻りましょう」と僕に手を差し出した。

しかし僕はその手を取らない。

「どうしたの？ 部屋に戻りたくないの？」

僕は声を発する事なくただ頷く。

「じゃあ少し散歩しようか」

穏やかな笑顔で女がそう言うと、屈んで僕の掌を優しく握ってくれた。

すると女の後ろから「私も行くー！」と大きな声。

「先生ヒドイ！ 私を置いて何処かいい所に行くつもり！」

僕を『ろくちゃん』と呼ぶ女の子の声だ。

「そんな事しないわよ、 “エリカ” も一緒に行きましょう」

それを聞くと女の子は満面の笑みを浮かべて「やったー！」と喜んだ。

しかし今、何故女は伍号を『エリカ』と呼んだのだろうか？

そんな事を考えていると白衣達が七号と呼ばれる男の子を連れてセンターを出て行こうと僕達の前を横切る。

『エリカ』もそれに気づき七号に「どうしたの？ 一緒に散歩行こう」と声をかけた。

だが七号は振り向く事はおろか立ち止まりもせず「行かない」と呟き、そのまま扉の向こうへ、センターに七号の『行かない』という言葉の冷たい余韻を残して。

背後から眼鏡の声。

「七号はこれから “コア” に “ダイブ” してもらおう」

『コア』とは一体？

眼鏡の言葉を聞き女の目付きが変わる。

「何故私に黙って事を決めるのですか!？」

「今伝えた。それに君は忙しそうに見えたので君の部下へ私が直接指示させてもらったよ、“ダイブ”の観測はこちらで行う、後で君のオフィスに詳細を送るから安心して子供達の面倒を見てくれたまえ」

眼鏡の言葉にはあからさまに嫌味が含まれている。

しかし女は動じる素振りも見せず「わかりました」と返す。

思うに全く動じなかった訳でないだろう、僕等にいらぬ心配をかけたくなかったのだと思う。

女は「ではお先に失礼します」と告げ僕達の手を引いてドアを開けセンターを後にする。

ドアを過ぎると背後で扉が重厚で機械的な音をたて自動で閉まる。

「本当に好きだよなあ」

「やっぱり自分の血を引く子だから可愛いんじゃない？」

「かもなあ、なんかこう見ていると母親みたいだな」

「保母さんの間違いでしょ、こんな宇宙の果てに居ると頭おかしく成り兼ねないし」

「ニュータイプと噂される天才も、結局はただの人間って事だな」

堅く閉ざされた分厚く重たい扉の向こうから、耳では聴こえない筈の嫌味を『エリカ』は感じた。

女は僕等を基地の屋上に案内してくれた。

屋上からは人工太陽に紅く照らされたコロニー内を一望できる。

『エリカ』は屋上に設けられた長椅子へ駆けて行き端に腰掛ける。

その光景を女は微笑ましそうに見つめてから彼女の隣に腰掛けた。

「どうぞ」と女に促されて僕も長椅子に掛ける。

「ここは私のお気に入りの場所なの、エリカとは何度か来ているけど、君とは初めてよね」

僕は返事をしなかった、だが女の声はまるでそよ風のように優しい響きでいつまでも聞いていたいと思わせる美しさだった。

「本当に先生はココが好きだよねえ、私も好きだけど」

猫がじゃれる様に『エリカ』が喋る。

「そうだ先生！ ろくちゃんにも名前付けてあげようよ！」

二人は僕の名前を考え始めた。

僕自身は別に『名前』など欲しいと思わないが、二人が考えている姿を見ていると、なんだか胸の奥がくすぐったい様な感覚がする。

女は白衣のポケットから白い手帳を取り出して熱心に何かを書き始

める。

『エリカ』がその手帳を覗き込んで「何してるの？」と女に問う。

「名前を考えているのよ」と女は返すが『エリカ』は更に疑問に思
い「変な字、先生の書いてる字読めない」と呟く。

「これは漢字よ、この字の一つ一つに沢山の意味が有るの。例え
ば私の『カオリ』って名前はこう書くの」と女はペンで『華織』と
書く。

「私がお母さんのお腹にいる時にお医者様に『女の子だよ』って教
えられたら、お父さんが『生まれたら着せるんだ』と言って花柄の
着物を買ってきたから『華織』なんですって、おかしいよね」

『華織』はそう言うてはにかむ。

この人の『華織』という名を僕は初めて知った。

『エリカ』は華織の話聞いてキャハキャハと笑う。

「じゃあ私の名前はどんな意味なの？」

華織は手帳に何かを書き込み僕とエリカに見せた。

「エリカは恵みの華って意味で『恵利華』と書くのよ」

「恵みの華かあゝ、なんか素敵！」

エリカが喜んでる。

しかし恵みの華か…

戦争の道具として作られた僕達に恵みなど無いのにそれをさらりと
言うのか。

だが不思議と華織の言葉は暖かい。

それは華織のエリカに対する思いが決して生半可な慈悲や贖罪の心
から来るものでなく、真心からエリカを大事に思っているのだと僕
は感じた。

この人はいい人なのだと思った。

「それじゃあろくちゃんの名前は？」

「そうねえ、君の名前は……」

華織は手帳に漢字を書く、そしてページを一枚破り僕に示した。

僕の名前は…

月面にて

「……………」

ん？

「……………」

この声は…

「ジユディゲル少佐」

その名は…

「少佐聞いていますか？」

俺はまどろみから現実へ呼び戻される。

「すまない少し眠っていたようだ」

「ちゃんと休養はとってますか？ 少佐は気を張りすぎなんです。任務に支障が出る前にしっかり休んで下さいね」

「ハイ、ハイ」

「“ハイ”は一回！」

「ハイ！」

慣れない事務作業で少し疲れていたらしい、珍しく居眠りをしてしまった。

しかし何故こんな昔の事を夢に見る？

この娘と居るとよく『あの頃』と同じ感覚を思い出す。

彼女の血の色の様に限りなく朱い髪がそうさせるのか…

それにしてもこの娘は俺が上官と解っていてこの振る舞いなのか？

まあ俺はそういう形式的な事が嫌いだからいいが、他に知れると問題だな。

「キシヨウ中尉。俺は堅苦しいのが嫌いだからその振る舞いでもいいが、他の士官が同席している時は遠慮しろよ」

「了解しました。ジユディゲル少佐殿！」

まったく、敬礼すらオママゴトだ。

ドアを“コンコン”とノックする音が部屋に響いた。

「誰だ？」

「フィリア・ニクソン曹長です。入ってもよろしいですか？」

「入れ」

ミーティングルームのドアを開けたのはブロンドのショートヘアが

よく似合う女性だった。

「ご挨拶中に失礼します。ジュディゲル少佐、そろそろよろしいですか？」

フィリアの言葉であの方がいらしたのだと悟った。

「もうそんな時間か。わかった今行く」

「どちらへ？」

「残務処理兼ご挨拶さ、あと必要機材の確認なり俺の仕事は山積しているのな。中尉も今日はもう自室に戻ってかまわんよ」

彼女にそれだけ告げてミーティングルームを後にした。

だが何故か後ろ髪を引かれる思いがする。

俺が彼女ともっと長く居たかったのか、彼女の思念が訴えているのか、俺の力では分からない。

それよりあの方のいるブリッジに向かわねばとリフトグリップを握る。

「随分長いご挨拶でしたね」

「すまない、待たせてしまったかな？」

「いえ、少佐の事ですからもっと早く済むと思っていたので」

小さく頼りない印象のフィリアだが、軍内外の多方面で情報に詳しく、小規模作戦では各隊へのアドバイザー役に回る事が多いらしい。今は艦のオペレーターを担当している。

お互いに初めて組んだのだが、たまにふざける所を省けば優秀な人材だ。

「それにしても一体何をお話していらしたのですか？」

「たわいもない日常会話だよ、まったくよく喋る娘でな、彼女が話に夢中の間に俺は眠っていたらしい」

「あのキショウ中尉がですか?…」

フィリアの声は急にはっきりしなくなる。

「珍しい事なのか？」

「いえ… 珍しいと言えばそうですが…」

「なんだ？」

「少佐の顔は怖いので怯えるかと」

これがそのおふざけだ。

「冗談のつもりだろうが笑えないぞ」

「失礼しました」

「それで本当の所はどうなんだ？」

「私も中尉と同じ隊は2度目ですが…、中尉は何か心を閉ざしている様な印象があります」

「彼女が？」

俺と話をする中尉はまるで俺を父親か何かに見立て、日常に起こった些細な出来事を大冒険の様に話す幼い娘の印象だった。

心を閉ざしているとは感じなかったが…

「少佐は特別なので心を開いているのではないかと？」

「俺が？」

「同じニュータイプじゃないですか」

「それは関係ないと思うぞ」

「“わかりあえる”というやつでは？」

非科学的な事を…

「まるでニュータイプを超能力者の様に思われては困るな、彼女の事ももう少し詳しく知っているか？」

「あの様な女性が好みなのですか！？」

「牢屋に入りたいのか？」

「失礼しました」

反省などしてないくせに。

「去年グラナダで大規模デモ鎮圧の際に緊急召集されたのが私とキショウ中尉で、キショウ中尉はその時はまだ少尉でした」

それは去年の1月3日、一年戦争を主な議題にした討論番組内にて地球至上主義の政治家ロバート・ラーズが『月の民は戦争を営利的に利用した戦犯である』との発言が発端となった事件である。

特にグラナダのデモは激しくTV中継で放送された保安部隊に4機の作業用MSが突進して行く光景はともモッキングで、視聴率80%以上と見なかった者はほとんどいないであろう数字を記録した。

デモは2週間続きグラナダ政府が連邦軍にデモ鎮圧の要請を求めたのは発生から1週間後、例のTV中継の翌々日である。

グラナダはジオンを支援していた過去がある為に公国解体後も連邦との繋がりを疎ましく思う政治家が多く、そいつらが連邦の助勢を拒み続けた事に対応が遅れたと推測できる。

「あの事件か。俺はその時は地球にいたからニュースで見た程度だ」

「向こうは過去の大戦の生き残りもいましたから姑息な作戦で戦闘用MSを奪われもして苦戦しました」

「という事はジオンの連中が民衆を味方に付けてのデモだったのか？」

「ごく少数ですが… 一体どんな手を使ったのかはわかりませんが行進に参加した市民だけで三千人以上はいましたし、ほとんどが宇宙産業系労働者なので大戦時の旧式MSも何機か確認されました」

「もはやデモの域を出ているな」

「軍も馬鹿だから私みたいな下っ端ばかり召集して、キシヨウ中尉が頑張ってくれたから早期に鎮圧出来ました」

「大活躍だった訳か？」

「私より全然若いのに作戦まで立案してくれました」

人は見かけによらないものだ。

「なのに心を閉ざしている？」

「はい、最初の挨拶の時も形式上の挨拶をそのままただけで、その後も自室で作戦を考えたり自機のメンテとかばかりで、生死をともしした仲と言うには… あまり他の兵士達と会話をしていません」

「なるほどな」

「んでやっぱり少佐はキシヨウ中尉が気になるのですか？」

「一応しばらく同じ隊として働く訳だからな、心に何か問題がある

のならば隊長として何かしてやらねばならんし」

「それだけですか？」

「お前は俺から何を聞き出したい？」

「いや、少佐は結構モテると噂を…」前言撤回。

ほとんどふざけた女だ。

「それにしてもまるで迷路だな」

「逃げましたね… 私は慣れました」

複雑な構造の艦内をフィリアに案内されてようやくブリッジの前に辿り着く。

フィリアに案内されなければこんなに早くは着けなかっただろう。

リフトグリップを放してドアの前で自分の軍服の襟を正しブリッジのドアを開ける。

すると連邦軍の制服を着こなした凛々しい後ろ姿が一番に目に入った。

「お待たせしましたヴォルフ准将」

静かに振り返った彼は18年前から変わらぬ自信と威厳に満ちた優しい笑顔で俺達を迎えた。

「久しぶりだなマーク、フィリアもご苦労だった」

軍曹が一步前に出てすまなそうに軽く頭を下げる。

「申し訳ありません。遅れました」

「気にするな、コイツの事だからと君を迎えに行かせたにすぎん、
本当に見た目は変わっても中身は変わらんなマーク」

「計算外な事態に陥りまして」

「言い訳が下手な所はいい加減直した方がいいぞ、出世に響く」

グレン・ヴォルフ准将、第03独立隊の旗艦“ディープ・ヘルメ”
の艦長兼、隊の最高責任者。

戸籍上の父がいない俺に住居や学校の手配をした育ての親だ。

「出世出来ない人間だからこの隊にいるのでは？」

グレンは笑う。

「そうだな」

サイド3がジオン共和国として連邦政府からの独立を宣言した宇宙
世紀0058年以降。

コロニーの独立自治を求める運動が増え続け連邦政府も経済的圧力
だけでは抑止出来なくなり、連邦はジオン残党狩りを名目にした公
の組織を結成し武力による征圧を行うが、組織は暴走し失敗。

連邦はその失敗から公の実行を諦め、影の組織での実行を開始する。その組織が独立隊“ディープ”である。

ディープの対象となるのは連邦軍の駐留を拒む独自の戦力を持った総てのコロニー。

コロニーに資源供給する船に所属不明の兵器で襲撃し供給を断つ。

いわば海賊だ。

連邦の支援無くしてコロニーの維持が出来ない状況を作り上げる事が目的。そのためディープで使用される兵器は連邦軍に存在しない企業の実験兵器が主。

そして本来艦隊指揮をする将官がたった一隻の艦長に過ぎない点もディープの特徴である。

これは対象のコロニーの資源供給を断つ為に必要と艦長が判断した独自作戦を連邦軍上層部の評決無く実行出来るという理に適った特徴であるが…

それは作戦により連邦政府や軍に不利益が生じた場合、責任の総てを艦長と隊の全員に求める為である。

ようするに連邦による海賊行為がバレて責任追及されても公には存在しない組織なので当事者である俺達を秘密裏に処刑して知らぬ存ぜぬを貫く事が出来るという腐りきった連邦の考え付きそうなシステムだ。

その為ディープに選ばれる者は連邦軍の体制に相応しくない連中ばかりで、この隊は連邦軍のゴミ箱に過ぎない。

グレンも連邦軍の体制に相応しくない人物でディープに移る前まで大佐だった。

グレンは地球生まれの連邦軍人にしては珍しい実力主義者で優秀な人材ならスペースノイドでも側に置きだがる変わり者。

本来低い階級しか与えられないジオン出身者達がグレンの下で着実に評価せざるを得ない実績を重ね続けたので軍上層部は彼を問題視せざるを得なくなり、グレン・ヴォルフ大佐は形式上准将に昇進させられ“ゴミ箱”入りした。

「悪かったねフィリア君、持ち場に戻ってくれ」

「はい」

快活よく返事をするフィリアはオペレーターの席に向かい、椅子に積んであったマニュアルを片手に持って機器の使い勝手の確認を始めた。

まだ新鋭艦に慣れていないのに俺の迎えという使い走りをされた訳か。

相変わらず人使いが荒い。

気遣いを忘れない所はグレンの魅力だが、グレンが部下に尊敬され慕われる所も“ゴミ箱”入りした理由と推測出来る。

いわゆる嫉妬だな。

「この艦には慣れそうかマーク？」

グレンはブリッジの窓の外に視線を戻す。

その先には無重力のドック内でボードPCを片手に艦の最終チェックを行っているメカニック達の姿が見える。

「ご命令ならば慣れます」

ブリッジはグレンの他に数人のクルー達。

ナビゲータのカイト・クライシ准尉は同じナビゲータのヘレン・バツク少尉に通信機やレーダーの使い方をレクチャー中。

「不器用だなお前は、いつか一緒に仕事をと思っていたが、まさかこんな形になるとはな」

「仕方ありません、上の連中からすればニュータイプは戦争の道具に過ぎないです」

「……………」

少し皮肉が過ぎたかな。

グレンは少しだけこちらに体を向ける。

見ると彼の横顔は微かに愁いを帯びたものだった。

「あの娘もだな」

「キシヨウ中尉ですか？」

少し背伸びをする様にグレンは顔を上げてブリッジの天井に視線を移す。

「ああ、彼女の事はお前に任せるよ」

「どづいという意味です？」

すぐに答えずグレンは俺の横を通り過ぎてブリッジのドアの前で俺の方へ向き直し重たげな口を開いた。

「そのうち話す……」

それだけ呟くとグレンはドアを開けて通路のリフトグリップを握る。

彼の背中には『着いて来い』という無言の言葉を発している様に感じたので、俺もブリッジを出てリフトグリップを握った。

グレンはすれ違うメカニックマン達に挨拶をする以外は艦長室に着くまで一言も口を開かなかった。

お互い無言のまま部屋に入る。

部屋の内装は艦長室という名に似合わず質素で、応接用の二人掛けのソファ―二脚と黒塗りのテーブルが無ければ独房となんら変わり

はない。

むしろ彼の境遇を考えると独房かも知れないとも思ってしまう。

明かりを点けながらグレンはようやく口を開く。

「そこに掛けてくれ」

促されて俺はソファアに腰掛けながらデスクの引き出しからファイルを取り出すグレンを伺う。

「お前を呼び出した理由はコレだ」とそのファイルをテーブルに置きグレンは俺の向かい側のソファアに身を委ねる。

「新型の極秘ファイルだったならわざわざブリッジに呼び出す必要はないのでは？」

「私の呼び出しを散々すっぱかすからそうなる」

「ジュニアハイスクール時代の事をまだ根に持ちますか」

「ハイスクールもだろ」

「そうでした」

18年前のアジール・コロニー開放作戦後、リポー・コロニーに移り戦災孤児施設での生活を始めた俺をグレンは養子に迎えようと度々訪ねてきたのだが、俺は彼から逃げる様に面会日は必ず姿をくらし続けた。

確かにグレンと彼の妻キャスリーンには返し切れないほどの恩がある。

しかし当時の俺は言葉に出来なかったが、幼心に俺みたいな人間がグレンと同じ姓を名乗るのはおこがましく、彼の出世の道を断つ事になるので申し訳ないと思ったからだろう。

それが“ジュディゲル”と俺が名乗ってきた理由だ。

今となつてはそんな気遣いは無意味だった訳だがな。

「そんな事より中を見たらどうだ、中々面白いぞ」

含みを持ったグレンの言葉に従ってファイルを開いた。

最初に目に入ったのは“ZERO Project”という表紙。

しかしページをめくっても新型MSのスペック欄は空白ばかりでこのファイルは詳細の意味をなしていない。

「トップシークレットってやつですか」

「ああ、今回は日本の宇宙航空科学事業団が開発したものらしいのだがな、その事業団の内実はサナリィやコロニー公社に技術提供しているスーパーエンジニア集団みたいだぞ」

おかしい事を言う人だ。

でもグレンのこういう豪快なネーミングセンスは好きだ。

「また変な言葉を当てますね」

「ハハ、売り込みの奴がそのファイルを私に渡すなり『詳細は日本へいらした時に続べてお教えいたします』ときたもんだ、よほどの自信があると見た」

グレンは笑う。

彼の笑顔には他人の心を明るく気持ちに出来る特別なものをいつも感じる。

「なるほど、だからスーパーエンジニア」

「一応私は説明を受けた、試作機の仕様はニュータイプ用だ」

「自分の機体になるのですから、そうでしょうね」

「それともう一つ、これは私の独断だが、キショウ中尉にも試作機に乗ってもらおう」

「やはり彼女の腕はそれ程ですか」

「……………」

俺の素朴な質問に彼は黙り込む…

部屋が沈黙で充ちていく…

それは時間が止まる様な永遠に感じられた。

「… 本当に何も知らないのだな…」

どういう意味だ？

確かに俺はあの娘の事を何も知らない。

だから彼女とMS隊長として話した。

……

いや違う。

彼女に何か懐かしいものを感じたからかも知れない。

彼女の血の様に朱い髪に…

静かに記憶を探る俺を見てグレンが言う。

「彼女はお前と同じだ」…

コーヒーブレイク

「冷めてますよ」

唐突に放たれた黒服の呆れ気味な口調に気付き男はコーヒーカップに視線を移す。

さつきまで熱い湯気を上へ昇らせていた黒い液体はすでに飲むのに最適な温度を失っていた。

「ああ、気が付かなかった」

「ずいぶんと御熱心でしたね」

「そうか？ それにしても彼女は中々研究熱心のような。想像以上の内容でコーヒーに手をつける事も忘れて読んでしまったよ」

男は湯気を失ったカップを手にとり冷めきったコーヒーを口に近付ける。

「大佐がお褒めになるならよほどですね」

「だから大佐はやめろ。それとあまりごまをするな」

本にしおりを挟んでテーブルに置き冷めたコーヒーを口にする。

「ぬるいな」

「でしょうね、5分以上たっていますから」

「そんなに読んでいたか？」

「御自分で本のページを確認してみてくださいよ」

「わかったわかった」

確かにしおりを挟んだ所を見るとやや読み進んでいるのが伺える。

男は彼女の作品に引き込まれていた。

カウンターの奥では熊髭が業務用の冷蔵庫から何かを取り出ししている。

しばらくして丸トレイに何かを乗せてやってきた。

「うちのコーヒーは冷めても美味しいですよ。これはサービスです」

トレイに乗ったそれは見たところチーズタルトに見える。

「なんだそれは？」

「これがピザに見えますか？」

「お前が作ったのか!？」

「他にいないでしょう」と熊髭は自慢気に笑う。

それを観て黒服は笑いを必死で堪える。

40越えて髭面のデカイ図体をしたオヤジがケーキの類をエプロン姿で作っているのを想像すれば無理もない。

熊髭はタルトを一つテーブルに置く。

「新しいメニューにと思いましてね、知り合いから教えてもらったのですが中々の味で、よろしかったらどうぞ」

しかしテーブルに置かれたのは一人前しかない。

黒服がそこに「俺の分は？」と噛み付く。

それに熊髭は冷たく「近くのケーキ屋で買ってくればいい」と返す。

「大佐ばかり優遇して、差別だ差別！」

「読書家特権！」

互いを責める訳でもないただのふざけた馴れ合いのを始める二人であつた。

「それじゃ読書家じゃない俺はタバコでも吹かしているよ」

黒服は席を立ち店の奥のテーブルへ移って上着の内ポケットからタバコの箱と古びたZipproを取り出す。

熊髭は男に話かける。

「もしかその本はあの古本屋の娘が書いたものですか？」

「よくわかったな、知り合いか？」

「まあ彼女にいろいろ聞かれまして」

「何をだ？」

熊髭はタルトの乗った皿の隣に紙ナプキンを敷いて上にフォークを置くと、丸トレイを胸に抱き込む様に持って話を続けた。

「やれ戦艦の中はとか作業用のMSとどう違うのかと」

「なるほど… アドバイザーをした訳か」

すると熊髭は大事な事に思い当たり慌てて「もちろん機密事項は…」と言葉を噴き出したが、男は彼が信用の置ける人物だと理解しているので「わかつている、お前の事だ」と言葉を最後まで聞かずに返し熊髭にホッと息をつかせた。

「出過ぎた真似をしましたかね？」

いかにもはにかんだ様に熊髭は右の人差し指で頭をかく。

「そんな事ないさ、元軍人がアドバイザーなら良いものが書けたと彼女は喜んだろ」

「ええ、お礼にとこのチーズタルトのレシピを教わりました」

「そうなのか、それを聞くと美味そうに見えてきた」

男は笑う。

「レシピも良いですがコックの腕も良いですよ」と熊髭の自己主張が返ってくる。

「それも知っている。ではお前はもうこれを読んだのか？」

「一応」

「感想は？」

「そこを聞いては駄目でしょう」

熊髭は笑う。

「確かに野暮だな」

だが突如熊髭が熱弁を振るいだす。

「しかし中々意味深な言葉が続く中で物語が展開し、その先には激しい戦闘と根の深い悲しみに涙し、最後は愛に……！」

熊髭は結局自分の感想を大半語っていた。

彼が気付いた時にはもうすでに遅く「今のは聞かなかった事にして下さい！」と口にはするが、この近さで言葉を聞き逃す方が難しい。

熊髭は激しく己を恥じている。

男は熊髭の素直な反応があまりに可笑しく大声で笑ってしまった。

「ハツハツハツ、結局自分から話しているじゃないか」

「何とも自分が間抜けです」

「だな。だが私はお前のそういう素直なところ嫌いじゃないぞ」

「情けないですが、そう言っていただけと有り難いです」

男はテーブルに置かれたフォークを取る。

「なるほどな、確かに意味深い言葉が多い。だが元軍人のアドバイスがここまで熱く語るのだから余程の傑作だろう」

男はタルトを一口食す。

タルトのサクサクとした生地 of 食感が口の中で響く。

次にほど好く甘酸っぱいレアチーズの味。

最後にさっぱりとしたレモンの風味が口の中いっぱいに広がり、あまりの美味さに笑顔がこぼれた。

「うん、確かに」

「でしょうー!」

「お前が作ったとは思えない味だ、甘すぎないからコーヒーにも合う」

一服を済ました黒服が「私にも一口」と言葉を挟んだ。

「だから言つたる」

「いいではないか、俺の護衛をしてきている事だし」

「…………… 本当にお優しいですねえ。大佐のお言葉に感謝しろ」

『冗談で言つてたクセに』と男は微笑む。

熊髭はカウンターの向こうに戻りあらかじめ用意されていたタルトを男の向かい側に置く。

「食いたかつたら座れ」

「はいはい」

黒服は男の向かいの席に戻る。

「素直じゃないな」

「俺がタダで食わすと思うか？」

熊髭が不敵な笑みを浮かべる。

「3クウールでいいか？」

「冗談だよ」

「知っているよ、お前はそういう人間だから言ってみただけだ」

仲の良い二人だ。

取り留めのない会話が続く。

背後に死の恐怖が迫る戦場に長く身を置く男からすれば、こんな取り留めのない日常でも生きる喜びになったであろう。

目の前で下らない話をする同僚と元同僚、そしてこのコロニーを生活の地にして子を養う人々の笑顔こそが彼の疲弊しきった精神を癒す薬なのだ。

黒服がタルトを美味そうに頬張っている。

気が付くと飲みかけだった男のコーヒーも新しいものに取り替えられていた。

やはり『ぬるい』という言葉を聞いて気を使わしてしまったようだ。

男はタルトをもう一口。

しつこくない甘味と酸味が心地好い。

コーヒーを一口。

ビターな味と薫りはチーズタルトの余韻を引き立てる。

男は再び本を取り、しおりを挟んだページを開く…

禁じられた者達

俺と同じ…

「強化人間という事ですか？」

「もっと悪い」

もっと悪い…

その言葉で思い当たるのはあと一つ。

「では… “エンキト”だと」

グレンは硬い表情のまま頷く。

エンキト。

遺伝子レベルで身体能力や知能指数を強化した人間。

戦力の乏しいアクシズが優秀な戦士を確保する為にクローニング技術と並行して研究をしていた技術だ。

しかし疑問が残る。

「連邦にそんな技術が有るとは考え難いのですが？」

「それがアジール・コロニーを攻撃した本当の理由だ」

「…!?!?」

驚愕で言葉が詰まる。

「彼女は戸籍上22歳ではあるが実際はまだ17歳の子供にすぎない」

「作戦後に得た技術を使って造られた…」

「そういう事だ」

「チツ！」

心から溢れる憎しみが止まらない。

どんなに時がたってもオールドタイプは力への欲を捨て切れないのか！

同じ過ちを幾度となく繰り返して…

クソッ！

「だからお前に彼女の事は任せる」

グレンへ返事する為己の感情を覆い隠す。

「解りました」

「同じ境遇のお前なら彼女の心のケアも出来るだろう」

哀しみを含んだ言葉であったが同時に俺が成すべき使命の提示と俺への信頼から出た言葉なのだと感じた。

グレンは部屋に漂う暗い空気を察して話題を変える。

「話が逸れてしまったな。それでもう一つ頼みというかこれは命令なのだが」「何でしょう?」

「新型受け取りの際お前はキシヨウ中尉と共にMSで降下して現地に向かつてもらう」

「シャトルでなくMSですか?」

「ああ、向こうがお前達のMSのチューニングを見たがっつていてな。今お前とキシヨウ中尉が乗っているMSと引き換えに新型を受け取る事になった」

「命令なら従いますが今の機体も一応は機密では?」

「上からの指示だ。“独立”なんて名前は付いているが上から命令が出れば従うしかない、それに代わりと言っては何だが今より優れた機体に乗る換えるのだから損は無いさ」

「今のが最低ですがね」

「また愚痴か。お前が特別だからだよ」

フォローの様な言葉だがグレンはそれに笑いを含めた言いようだった。

「お褒めの言葉として受け取ります」

「あれはお前専用に組まれた機体らしいからそう言うな」

「確かに遠距離狙撃は得意ですが格闘戦が苦手な訳では」

「そのお得意の遠距離狙撃に合わせたのだから格闘に向かなくても仕方あるまい」

「アナハイムで試作した最新の小型ジェネレータと大推力を生む熱核ロケットと遠距離狙撃をサポートするAIの実験機体…」

「まさに特化しているな」

品の良いグレンの笑いが部屋に響く。

「だがあんな機体役に立ちますか？ 加速Gは殺人レベルですし、並の人間に扱える機体の方が…」

俺の皮肉を最後まで聞かずにグレンが口を出す。

「私はお前のクレーム処理係ではないぞ。この隊が組まれる前からお前の戦績は聞いていたし『マークなら』と思って実験機をお前に回していたのも私だ」

少し驚いた。

ずいぶんと高く評価されたものだ。

まあ普通じゃない俺に毎度危ない仕事が回される事は仕方ないとい

う諦めもあつたし慣れていたが、まさか危ない仕事を回す張本人の一人が俺の養父で、しかも理由が『信頼』だ。

見方を変えれば俺を超多忙にして軍を除隊させる気でもあつたのかもしれないが、何故か嫌な気はしない。

親心というやつか。

「すみません、また悪い癖が出ました」

「お前もいい歳になつたのだから直せ、上官からの命令だ」

お叱りなのだろうが親しみの有る言い回しだった。

「前から言っているだろう。難しい事を任された時はそれだけ……」

「自分が評価されていると思って勤める……ですね」

今度は俺がグレンの言葉を最後まで聞かずに口を挟んだ。

この言葉はグレンのお叱りの定番だったから覚えてしまった。

「相変わらずなのはお互い様ですね」

何だが可笑しいな。

こうして話すのは3年ぶりだろうか。

俺が連邦軍を志望した時グレンは激しく反対したが結局最後は俺の決意に折れて応援してくれた。

以降はグレンお得意の根回しで仕事が忙しく、たまに会食に行く程度で疎遠になっていた。

「まったく… そうだ！ いい歳ついでに聞くがお前恋人はいないのか？」

突然何を閃いたかと思えば女の話だった。

俺は結婚する気が無いというのに…

こつこつのは適当にあしらう。

「明日は出港なのでそろそろ…」

席を立とうとするとやはりグレンは俺を呼びとめる。

「もう3人も見合い写真を送ったのに返答が無いのはどういう事だ？」

まるで尋問の様だ。

「自分はやはり独り身の方が…」

「見合いが嫌ならフィリアはどうだ？ 彼女は優秀だし美人じゃないか、お前に興味も有るようだし歳もそう離れていまい。職場恋愛でも構わんから」

要望の様な言葉が続く。

俺の感想を言えば『知るかよ』の一言だ、しかしそれを口に出れるほど幼稚な子供ではない。

ふと言い訳の様に出た言葉が「今は仕事が忙しく…」だったが「こういう時ばかり忙しいのだなお前は」とすんなりグレンに言い訳とバレた。

「マーク… お前も今年で29だ。女性士官から人気が有るとよく噂を聞くがまったく色気のある情報を耳にしないのはどういう事だ？ 私は早くお前に家庭の幸せを知って欲しいのだよ」

俺の事を思つての言葉と理解出来るが、それに応える事は出来ない。それにしても吹き出す様にそんな言葉をポンポンと…

こんな事をグレンに吹き込んだのはきつとフィリアだな。

グレンは一つの事に思い至りゆっくりとそれを確かめる様に口にする。

「やはり身体を気にしているのか…」

俺は遺伝子操作された人間な上に未熟なニュータイプ能力を補う為の薬物常用で既に身体はボロボロだ。

白髪だけならまだしも男としての機能も無くなっていると思う。

そついう色っぽい関係になつてもお互いに辛いだけ。

グレンが思い詰めた表情で告げる。

「過去に囚われるのは辞める。お前一人の問題じゃない自分をもつ

と大事にしる」

奴が生きている限り俺の幸福なんて無い。

絶対にあいつを…

「俺一人の問題ではありませんが、俺の問題な事に変わりないです」

俺は席を立つ。

「マーク…」

グレンの口から悲しい響きの俺の名がこぼれた。

奴を殺せるのは生き残りの俺一人。

幸福なんて二の次でいい。

俺はドアへ向かって歩きながら呟く。

「キシヨウ中尉の事はお任せ下さい」

言いながらドアの前でグレンの方を向くと彼はソファから立ち上がり両手をズボンのポケットに突っ込みこっちを見る。

「彼女の背中とあの朱い髪を見ると少年時代のお前を思い出すよ」

「グレンも嫌味がお上手だ」

俺はそれではとグレンに挨拶をし部屋を出ようとする。

「マーク！」

ドアを開けようとするのとグレンに呼び止められた。

「まだ何か？」

ゆっくりと間を持たせグレンが口を開く。

「お前……」

そこまで言うとグレンの言葉は詰まる。

「……笑うのが上手くなったな」

「おかげさまで」

「それだけだ」

「……？ では明日」

彼へ敬礼して部屋を出た。

グレンは自分のデスクへ歩き黒革張りの立派な椅子に腰を下ろし背もたれに身体を押し付ける。

「マーク…… 彼女はお前にとって生易しいものでない…… エンキトと呼ぶより……」

独房の様な部屋に一人残されたグレンは、かける対象を失った言葉を呟き続ける。

「キメラだ」
…

もう一人

同じ頃。

貴族の様な金の刺繍で装飾された軍服を纏う男が眼前に広がる青い星を眺め再会の時を待っている。

男はため息の様に呟く。

「そろそろか…」

男の隣には身の丈190cmはある長身で黒い短髪の軍人が控える。

「内通者の話では新造艦の完成が遅れたとの事です殿下」

「そのようだな」

二人は超大型スクリーンに投影された母なる星を眺めて何を思っているのだろうか。

部屋は中世ヨーロッパの宮殿を模した美しい装飾が施され、床と壁は大理石の様な白く美しいマーブル模様、部屋の広さから小規模なブリーフィングルームかパーティー会場のようだ。

殿下と呼ばれた男は呟く。

「10年だ」

「はっ？」

「いや正確には13年か、連邦の黒い鷹…」

「ああ… 地球では反政府テロで御活躍だそうですね」

「腕をあげたよ、本当に待ち遠しい」

「そうでございますね」

殿下は肩の辺りで緩く纏めた朱く長い髪を翻しドアの方へ向かう。

それを見た長身の軍人は右手に持っていたリモコンでスクリーンを壁と同様のマーブル模様に切り替え、歩き出した殿下を追い抜きドアを開ける。

二人は格納庫へ向かう。

庫内では壁際に立たされたMSが3機、整備の為に仰向けに寝かされた機体が1機。

二人は作業員が使う高所通路キャットウォークからそのMS達を見下ろした。

「まずはお前がファーストコンタクトをとれリューク」

「はい」

「その間私の隊は周回軌道上で根回し済みの人工衛星に取り付き衛星の望遠鏡をハッキングしている。そして奴らの降下まで待ち降下後の奴らの目的地を特定、その後お前達と合流し降下だ」

「この作戦で行けますでしょうか？」

「愚問だな。地球の人工衛星のほとんどは既に骨董品だ」

「しかし連邦軍の船に見付かる危険も有ります」

「平和ボケで御役所仕事の連邦だ。パトロールの目は穴だらけで意味をなしていない、戦艦ならまだしもモビルスーツ3機ならその穴をすり抜ける。見付かったとしてもデブリと思うさ」

「たいしたお方だ」

リユークの口から感嘆の言葉が漏れる。

部下の言葉を軽くあしらう様に笑う。

「何を言うと思えば… どのみち危険である事は承知の作戦だ。用心は怠るな」

「ハッ！」

軍隊式で快活の良い部下の了解。

殿下は壁際の左端に立つ白いMSを見る。

機体のシルエットは連邦製MSの様な直線的なデザインでシャープな印象を与えるが、ヘッドは一年戦争でジオンが使ったゲルググに似ている。

ランドセルには後方へV字に伸びる角型の4本の大型バインダーが装備されているが、それはバインダーではなくメガ粒子砲を搭載した4機の大型ファンネル（無線誘導兵器）でオールレンジ攻撃を可

能にしている。

そのファンネルの間から頭部の後ろへ垂直に伸びた棒状の物は試作された超大出力の巨大ビームサーベル“フランベルジュ”

ランドセルから供給されるエネルギーを直接充填する為に柄から直線上に伸びたソケットが存在し、その部分は文字通りランドセルに刺さる様になっている。

フランベルジュはビームサーベルの最大出力を求めて開発されたもので刃を発生させる時間は30秒程しかないのに対し再使用には140秒の充填が必要であるが、切れ味はシリンダー型コロニーのミラーを簡単に切断出来ると言えば想像しやすいだろう。

発生させるビームの形状は片刃の包丁に近いものだ。

他に両腕には射速性能の高いビームカノンが内蔵されている。

携行武器は一般のアナハイム製ビームライフルとビームランチャー、その他ブッホコンツェルン試作のブランドマーカーと呼ばれる攻守一体小型ビームシールド等、汎用機と専用機の間間的な機体である。

「このゼノで遊んでやる」

「ヴァロール殿下専用のカスタム機ですね」

「付け焼き刃だがこれなら十分だ」

「今時ファンネル搭載機で相手しなければ落とせない敵機と考えると“王牙”はそれ程の機体ですか？」

「あれには“コア”が積み込まれているからな、それを使われたら20機はMSが墮ちる」

「“コア”ですか…」

「オリジナル」と言った方が正確かな」

その言葉を聞いてリユークはようやく理解する。

「実在したのですか!？」

「ああ、得体の知れない物の代表的な存在だな、あれが現在のサイ
コミュニケーション（脳波制御装置）の原形さ」

「都市伝説の類だと思っていました」

「だが実際に存在する。旧ジオンの時代からの最高機密であったが、
まだ技術的な進歩の拙い時点から人体実験も行ってしまったので幾
人も犠牲になった、おかげで公国の幹部でも一部しか知らないハズ
の最高機密も戦争が始まった時点では軍の下士官すら噂話をしてい
たからな」

皮肉含みに笑う殿下の顔はやはり彼に似ている。

「それより俺の機体に乗る気はないか？」

「はっ…?」

挨拶

翌日。

出航前の号令の為、独立隊の主要メンバーがブリッジに集合した。

集まった総員は30人は居るであろう、そのほとんどはブリッジクルーとMS隊で残り数名は各要員の士長のみだが、30人ものメンバーが入る広いブリッジは近代の宇宙戦艦では珍しい。

しかし流石にこれだけの人数が揃うと狭く感じる。

「ブリッジクルーとMS隊、及び各士長の皆、集まってくれて感謝する」

ブリッジの正面窓を背にいかにも軍人という感じでグレンが背筋を真っ直ぐにして立ち挨拶を始めた。

「まずは出航が遅れた件を代表の私から謝らせてもらう、まあ予期せぬデモの余波でアナハイムの社員側がストライキを起こしたのが理由の一つではあるが、全く予想出来ない事態ではなかったので私がおかしらの対策を練るべきであった。おかげで数日基地内待機という暇を持て余した事だろう、申し訳ない」

別に誰も気にしてはいないがこれがグレンのやり方だ。

待機命令も基地内って制約は付いたが休暇みたいなもので遊び好きなメンツを除けば皆有意義に活用出来た様だし。

「本艦の作戦目的をあらためて説明する」

ここに居るほとんどがこの隊を“ゴミ箱”と認識してはいたが正式には“独立隊”であるが故に体的な説明をするグレン。そして既に二つ有る独立隊を新たに結成した理由も述べた。

「今年5月18日に第01独立隊が所属不明のMS隊と交戦して壊滅した。奇跡的に02独立隊に回収された2名のMSパイロットの証言によるとサイド2のレジーヌコロニー、旧アイランド・ブレイドと言えは解り安いだろうか、その警戒任務中でデブリ群に潜伏していた艦に突如6機の正体不明MSに急襲されたようだ」

アイランド・ブレイドは過去の一年戦争で被害を受け後のコロニー再生計画で移送中にジオン残党が計画した星の屑作戦で地球へのコロニー落としに利用された。

しかし実際に地球に落とされたのは共に移送されていたもう一つのアイランド・イズであった為にブレイドはしばらく行方不明であった。

再び発見されてからは新規コロニー“レジーヌ”として改修されてサイド2に移りレジーヌコロニー自治政府の意向で宇宙難民を多く受け入れるていた。

「それで我々は母艦を失い任務を果たせなくなった01隊に代わりレジーヌコロニーの警戒任務に付く」

ここまではクルーのほとんどが知る俺達の仕事。

だが第01独立隊が生き残ったメンバーを入れて再編される事は無

いだろう、相手が誰か知らないが連邦のゴミを見事処分してくれた訳だから、運良く生き残った奴らの身は恐らく地球で幽閉って所だろうな。

問題はここからだ。

俺達の目的はレジューコロニーの警戒任務となっている訳だが出航後の進路を知るのは恐らく副司令を兼ねている俺だけ。

「更に新型MSの実動試験も行うのだが、そのMSはトップシークレットの為に我々が現地の地球まで受取に行く、と言っても本艦は大気圏での運用は想定されていないのでMSパイロットのマーク・ジュディゲル少佐とユリ・キシヨウ中尉の二人で地球に降りてもらい本艦は周回軌道上で二人の帰還を待つ」

受取を終えた俺達をシャトルが大気圏離脱用ブースターで周回軌道まで上げてディープ・ヘルメに拾わせる寸法か。

ブースターともなれば軌道が1度でも外れたら宇宙漂流って笑えない話しだな。

「私からは以上だ。ジュディゲル少佐、副司令として君からも皆に何か一言」

群集の前列に立っていた俺はグレンに促されて前に歩み出し彼の横に立つ。

正直こっぴつのが苦手だ。

それを知っていてやらせるグレンも鬼畜だと思つよ。

「第03独立隊副司令兼MS部隊隊長のマーク・ジユディゲル少佐だ。皆知っているだろうがこの隊はある種特殊だ。故にこれから超過酷な任務をこなす事になるだろう」

我ながらいい加減な語りだ。

「まず俺達は地球へ新型MSの受取に向かうがその後はレジーヌへ進路をとる。恐らくレジーヌ側の武装勢力と交戦する事はある意味必然に等しい、01隊が壊滅した事実で向こうも相当手強いと想像できる。いつ何時俺達が01隊の様になるかも知れん事を覚悟してくれ、以上!」

こんなもんかな。

俺の肩にポンとグレンの手が置かれる。

「ではご苦労、持ち場に就いてくれ」

グレンの敬礼に合わせてブリッジに居た皆が敬礼した後、各々の持ち場に向かう。

「私もこれで失礼します」

「ご苦労」

皆が持ち場に向かうのを見送ってから改めてグレンに敬礼しブリッジを出る。

「ジユディゲル隊長!」

リフトグリップを握ろうとすると背後から呼び止める声があった。

「何故新型が自分ではなくあの小娘に！」

俺がブリッジから出るのを待っていたであろうこの青年はまるで殴りかかるかの勢いで言葉を言い放つ。

青年は以前北極で別の試作MSのテストパイロットと一緒に勤めたロビン・パーソン中尉であった。

彼は自身の優れたニュータイプの資質に一種のプライドを持っていて、そのプライドが過剰過ぎ独断先行する悪い習性で部隊を危険にさらす事がしばしば。

グレンが試作機のテストパイロットとして引き抜く前までは“噛ませ犬”と揶揄されてきた問題児であった。

まあ確かに彼のパイロットとしての適性は優れているが、23歳という若さと過剰なプライドが彼の短所だ。

グレンの事だからそういう奴も使い方って認識で引き抜いたのだから。

恐らくブリッジで新型機の受取を任じられたのがキショウ中尉と聞いて彼女がパイロットに選ばれたと察したようだ。

それで号令中グレンに意見したい気持ちをじつと堪えていた訳か。

「俺に八つ当たりしても結果は変わらない。パイロットを決めたのは准将だ」

「じゃあ自分が外された理由を！」

このような手合いにはきつい言葉を浴びせた方が有効だな。

「知らん！ 頭を冷やせ」

我ながら突き放す様に言ったが、この青年に有効に働くか分からなかった。

しかし慰めの言葉を求める様なタイプでもないので彼を置いて格納庫に向かう。

途中フィリアの艦内アナウンスが「総員に告げます。艦の拘束を解除しますのでシヨックに備えて下さい」と流れる。

間もなくガクンと船が左右に揺れて危うくりフトグリップを離してしまいそうになるが右腕に力を入れて堪えた。

エアロックに入るが戦闘配備命令が出てないので格納庫内は空気が入っただけで素通り出来た。

格納庫へ出る為の分厚いハッチを開けて直ぐに整備士長の名を呼ぶ。

「おーい、アーノルド！」

「ジュディゲルか？ 今お前を見てるからこっちに来い」

ハッチを出てすぐ左側に立つ黒いMSのコクピットからアーノルドの声が聞こえたので足で床を蹴り慣性で自身の身体をそのコクピット

トまで飛翔させる。

「なんでコクピットなんか見てるんだ？」

開いていたコクピットハッチに手をかけて身体を制止させてから中を覗き込むとアーノルドは右のアーム・レイカー（球状操縦桿）をバラしていた。

「次の機体もコレなんだとさ、だからお前の癖を記録してる」

「アーム・レイカー分解しちゃ出撃出来ないだろ」

「俺なら3分もかからないで組み立てられるから問題無い」

彼はアーノルド・シユワイガー曹長。

元々は民間企業の人間であったが軍で機械工学に優れた人材が不足した時に教官として迎えられたのだが、職人気質で一見無愛想な彼は上からよく誤解される事がありグレンが引き抜いた。

「あそ。新型機もアーム・レイカーか」

「新型の事を聞きに来たなら諦めな。俺は准将が命令した機体の記録作業しかやってない」

「はいはい。なんか手伝う事ないか？」

「無い。今の仕事はこれ。もう1機はハンナが見てくれる」

「もう1機？」

「キシヨウ中尉のだろ」

「ああ、そうだな。じゃあ彼女の機体の記録が見たいのだが」

アーノルドは一呼吸置いて叫ぶ。

「おいハンナ！ キシヨウ中尉の機体整備記録出せ！」

うるさい声だ。

この至近距離では鼓膜が破れる。

「そんな大きい声出さなくても聞こえているわよ」

左斜め向かいに立つ派手なオレンジのカラーリングが施されたMSのコクピットが開き、中から褐色の肌の美女が姿を現す。

「あんだねえ、毎度毎度言ってるでしょ、うるさいって」

少し不機嫌気味な彼女がハンナ・シュワイガー、アーノルドの妻だ。

彼女も旦那と同じメカのプロ。

アーノルドよりか愛想よいが基本似た者夫婦ってやつかな。

一隻の戦艦の中で夫婦が出来る事はまあ有る話だが、元々夫婦の者二人が船員に選ばれる事は軍では非常に珍しい。

その珍しい現象を導いたのはアーノルドがこの艦の整備士長をグレンから任じられた時に妻のハンナが『なら私も一緒に』とわざわざ

グレンの自宅をたずねて直談判したからだとか。

彼女は元々軍でMSメカニックのアドバイザーをやっていた。

その時にアーノルドと知り合って恋に落ちたらしい。

だがハンナの美しさを考えればもっと階級の高い士官と結婚していてもおかしくはない、にもかかわらずあの口を開けば機械の事しか出ないアーノルドを選ぶとは世の中わからないものだ。

おまけにハンナはアーノルドにゾッコンで独立隊の実態を知ったハンナは夫を一人行かせる事が出来ないとの事でグレンに殴り込みだ。

そこだけ聞くと本当にお熱い二人だが仕事中の二人は一見そうは見えない。

にしても来年40になると思えない程ハンナは美しい、今だに若い士官からも凄い人気だし。

アーノルドも男前で悪い人間でもないが、性格に難があるので尚更二人の結婚は疑問ばかりだ。

その疑問も含めて結婚した当時はハンナを狙っていた男達にアーノルドもさぞ怨まれた事だろう。

「こっちはセンサーチェックの為に火が入ってるんだから、音感センサーで外の音は丸聞こえなの」

毎度毎度この二人の会話は怒気を帯びていて聞いている側は気を使うよ。

「忙しい所すみません。その派手なのがキシヨウ中尉の機体ですか？」

「そうよ。あなたに似て荒い乗り方してるから4〜5回メンテナンスしたら中身全部入れ換えよ」

「そう言わないで下さいよ」

ハンナが整備中だった機体を見て俺は見た目そのままの感想を口にする。

「しかしそんなド派手なオレンジじゃまるで作業用MSだな。その色じゃ敵機のセンサーにすぐ捕捉されて狙い撃ちだよ」

「あんな何も知らないのね、それが狙いなのよ」

「はっ？」

アーノルドが俺の疑問に答えた。

「機体を見る限りあの娘さんはうちのエースだよ」

「どついつ意味だ？」

「各関節部の駆動疲労と全スラスターの推進剤消耗率が他の誰よりも激しいからよ。あの娘は自ら戦場で困役を買って出て、かつ生還してるパイロットさ、機体の統べてを見りゃそいつの戦闘スタイルなんざ丸解りだからな。整備士の特権」

「その通り同感だね。ホント彼女なんとかしてよ隊長さん！ その調子で今後もやられたら私らの仕事も終わらないし、いくら補給が有っても全然足りないよ」

「なるほど。彼女の資料を見ても戦績ばかりで戦闘スタイルまでは解らないからな。しかしそう言われても困るよ、とりあえず彼女の機体詳細を見せてくれハンナ」

「下にある道具入れの一番上の引き出し」

ハンナがコクピットから足元にある金属製でキャスター付きの引き出しを指差す。

俺は「サンキュ」とハンナに左手を振ってその道具入れの所に飛び降り一番上の引き出しを開ける。

中にはブルーやイエローなどのファイルが5冊程入っていた。

「ごめん言いそびれた、赤いファイルね」とハンナのアドバイスを聞き俺は赤いファイルを抜き出す。

その様子を見たハンナはコクンと頷いた後コクピットに戻ってハッチを閉じた。

俺はファイルを数ページめくり読み思う。

「右端にクリップ挟んでまとめるクセ直したのか？」

「あのジジイうるさいから今後は全部ファイルにまとめろってさ」

「“ジジイ”って？」

「グレンさ、鬼の居ぬ間に言ってやった」

アーノルドが笑う。

だがまさか彼の口からグレンへの愚痴が出るとはな。

しかしファイルを読んでもみるとハンナとアーノルドが言った通りムーバブルフレーム（MSの骨格）の部分発注書の数が異常な多さだった。

機体の型番は“RGZ-00100”と彼女の資料にも書いて有ったものだが…

「そついえばこの機体はあまり見ないタイプだ」

俺の呟きに問題の機体からハンナのマイクを通した声が流れ格納庫内に響いた。

「よくぞ気付いた！ さすがは隊長だね！」

「この機体は過去にエウーゴで開発されたモビルスーツ2機のコンセプトを受け継ぎ、宇宙世紀1000年を記念して作られたワンオフ機！ 通称ハンドレット！」

随分熱の入ったご説明だな。

エウーゴといえば地球連邦軍外郭新興部隊ロンド・ベルや今の第13独立艦隊の礎になった組織。

元々反連邦組織のエウーゴが活躍していた時代は旧体制の連邦は腐敗が進みジオン残党も着実に過去の組織力を取り戻しつつあった時代。

そんな激しい三つ巴の大戦をくぐり抜けたエウーゴは数多くのMSを開発し戦果を挙げてきた。

ハンナの熱弁は続く。

「ベースとなつた2機はMSZ-006とMSN-00100で双方とも発表された当時は傑作と謳われ、現在でもその過去を知る兵士達は伝説の様に語る！」

たまに彼女は本当に女かと思う。

「まずMSZ-006ですが、その機体の特徴は現在では珍しい可変MSという点。しかし可変MSは構造が複雑な為コスト面や整備性の悪さからRGZ-00100は非変形機として設計された。そう考えるとMSZ-006のコンセプトなど受け継いでいないかと思えるが… 技術者はMS形態でのMSZ-006の高い機動性に注目したの！ その機動性の理由はMSZ-006が両脚部に熱核ロケットエンジンを搭載し巡航形態変形時にその脚部をメインエンジンとして機能させていたから。よってRGZ-00100も脚部に再設計された熱核ロケットエンジンを装備し同じくMSZ-006に装備されていたロングテールバーニアスタビライザーもRGZ-00100用に再設計し装備！」

話が長いな。

「更に変形機能を排した事で機体構造に余裕が出来、頭長高20m近いMSZ-006に対し本機は17.1mまで機体の小型化に成功！ 熱核ロケットとロングテールバーニアスタビライザーと相まって非常に高い機動性と運動性を実現したの！」

俺はMSに乗る事が仕事だがMS自体に興味は無い。

この話は一体いつ終わるのだろうか…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1382y/>

機動戦士外伝『フィクション』

2011年11月2日03時07分発行